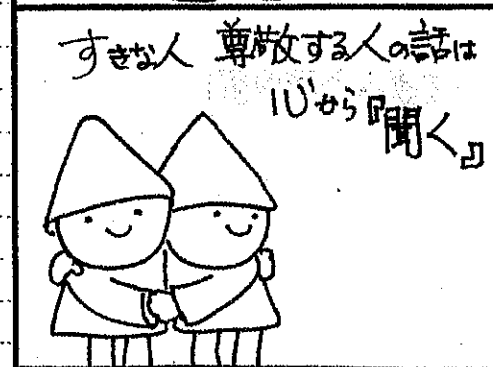
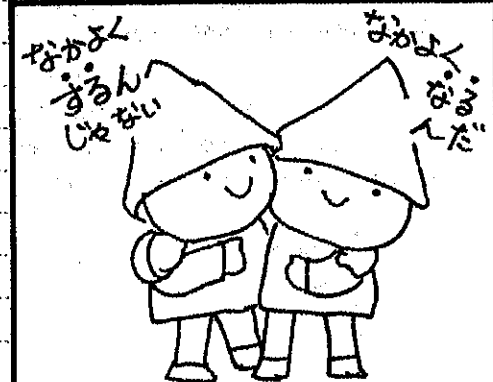
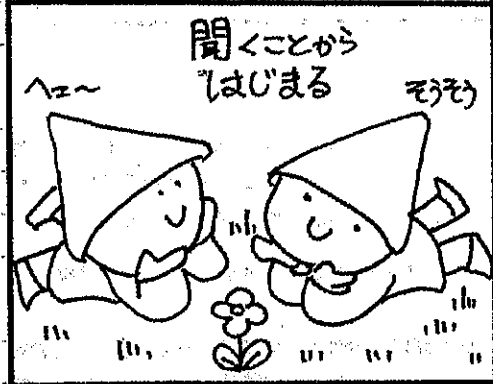
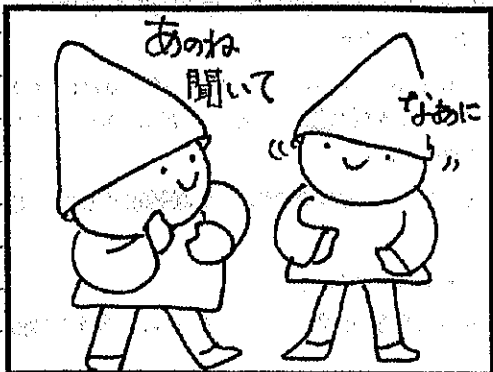


特別支援だより No.18

令和3年9月6日（月） 特別支援教育コーディネーター 松田敦子

4 「聞く」ことはコミュニケーションの入口



「聞く」ことは、コミュニケーションのはじまりです。話を聞くときには、相手に対して気持ちが向かっているということです。

相手を信頼し、尊敬している場合には、真剣に「聞こう」とします。反対に相手を好ましく思っていないときには、「聞いているふり」をして、その場をやり過ごそうとすることがあります。

「聞いてあげよう」という心のつながりを求めるところから、なかよくなることができるのです。自分のいたいことだけを相手に話しても、一方通行で終わるだけです。

さて、それでは教室でどうするかというと、「聞く」ためにまず「見る」ことを大切にします。話す人を「見る」ことが、まず意識を向けることになります。話す相手を「見る」ことで、相手のいおうとすることを理解しようとする扉が開かれるのです。

古くから「相手の顔を（目を）みて聞きなさい（話しなさい）」といわれるのもこのためです。「聞く」ためには「見る」ことが必要であり、それは、相手のいおうとすることを理解しようとする「知る」ことにつながるからです。

そして、「知る」ことは、疑問を生み出したり、考えを深めたりするためのスタートです。知り得たことから、考えを深めてやっと「わかる」というところに到達するのです。見ること・聞くことが、心情にも、学びにも大きくかかわっているのです。聞き手のうなずきが、話し手の心を豊かにするのです。

「聞く」ことは、「思いやり」の入口です。

Q10

音楽の授業でよく起きるのですが…

自閉症の子どもは、音に対する過敏やこだわりを持っていることがあります。また、一部の子どもはリコーダーの穴を上手にふさげないなど、不器用な面があります。

自閉症の特性から考えてみましょう

- 特定の音に過敏だったり、大きな音が苦手なことがよくあります。例えば、大太鼓やシンバルなどの特定の楽器の音、リコーダーのキーンとした音などです。また、全員での合唱の時に、耳をふさいだり教室の隅にうずくまるといった様子を見ることがあります。(大きくて怒鳴るような声が不快なことが多いようです。)
- 特定の嫌いな音や、大きな音がすると耳をふさいだりすることのある子どもでも、お気に入りの曲をかけると口ずさんだり、楽しそうにリズムをとったりすることがあります。教科で行うリズム学習は苦手でも、好きな曲のリズムには乗って楽しそうに体を動かす(興奮気味になることもある)子どももいます。
- 自分の大好きな歌(アニメのテーマソングや特定の歌手の歌)をよく覚えていて、教科で学習する課題曲や学級活動で決まった曲を歌わずに、好きな歌を歌おうとすることもあります。
- 上記のような行動をとるからといって、決して音楽が嫌いだと解釈しないようにしましょう。
- 一部の子どもには、リコーダーの穴を上手にふさいで吹く、ピアノカを持って鍵盤を弾くというような、同時に複数の動作をこなすことに困難がある場合もあります。

支援のヒント1●自閉症児への指導例

小学校5年生の知的障害を伴う自閉症の男児。歌うことは大好きですが、リコーダーもピアノカも吹けません。自分の思った通りに授業が進まなかったり、新しい曲の学習を始めようとする、パニックを起こして奇声を発したり、座り込んで動かなくなったりします。このような場合、支援の方法としては以下のようなことが考えられます。

- ① 楽器の演奏ができないのは、運動機能の困難(簡単にいうと不器用)があると考えられる。できないことを無理強いせず、いつも大きな声で元気よく歌っていることをほめる。
- ② 新しい課題を始めることに抵抗があるためと考えられる場合は、次の音楽の時間の学習内容を事前に伝えたり、放課後や帰りの会などに新しい曲を適度な音量で聞く機会を設けるようにしてみる。ふだん新しい課題を行うことに特に抵抗がないのに新しい曲の学習を嫌がるような場合は、その曲に、本人にとって不快な要因があると解釈した方がよい。
- ③ 本人が「音楽の時間」の学習パターンを覚えてしまい、そのパターンでないとやらないといったこだわりを防ぐために、学習内容ごとにブロック分けし、組み合わせを変えるように工夫する。例えば、リコーダーと歌という組み合わせもあれば、歌とリズム遊びという組み合わせもあるといった構成を考える。その中で、本人が楽しく参加できる内容を盛り込んだり、小黒板にブロックの内容を書いておき、今行っている活動や次の活動が何かを明確に示すといった配慮をする。
- ④ 合唱や特定の音などに強い抵抗を示したり耳ふさぎをするような場合は、参加することを強要しない。学年での合奏練習といった場合、状況によっては、一時的に待機する避難所のようなものを取り決めておく。
- ⑤ 音楽の授業内容のうちで、参加できる部分を本人に確かめたり、不快なことは無理に我慢しなくて良いと約束して安心させることも必要。

支援のヒント2●高機能自閉症・アスペルガー症候群の児童への指導例

小学校4年生の高機能自閉症の男児。リコーダーの練習の時に、友だちから「音が変だ」と言われてけんかになってしまいました。本人は楽譜を覚えることが得意で、リコーダーを完璧に演奏することに強く執着しています。それを注意されたらと勘違いしてカッとしたようです。このような場合、支援の方法としては以下のようなことが考えられます。

- ⑥ 友達が指摘した事柄と本人の解釈にズレがありけんかになっている場合は、教師が仲介に入ってお互いのやりとりを再確認し、友だちが何を言おうとしたのかを明確にして、誤解を解くようにする。
- ⑦ 「友達と強い口調で話さない」といった会話のスキルを、別の時間に具体的に教える。
- ⑧ リコーダーの練習に一生懸命に取り組んでいることを認めながらも、いつもいつも完璧に演奏できるとは限らないと教えていく。
- ⑨ トラブルになりやすい特定の子どもがいる場合には、合唱や合奏を行う時のグループ編成や席の配置などを考慮する。